

初等図画工作における授業評価報告

美術教育講座・杉林英彦

1. 授業概要 本授業は、学校教育教員養成課程及び特別支援教育教員養成課程において、小学校教科科目の選択科目の一つとして開設されている。筆者が担当する科目の受講登録者数は、52名（学校教育教員養成課程・国語教育専修2回生14名、社会科教育専修2回生7名、数学教育専修2回生5名・4回生1名、理科教育専修2回生1名、音楽教育専修2回生3名、美術教育専修2回生4名、保健体育専修2回生7名、家政教育専修2回生6名、英語教育専修4回生2名、芸術文化課程音楽文化コース4回生1名、科目等履修生1名）、そのうち男性が23名、女性が29名である。しかし、継続的な受講を行い、単位を取得したのは51名である。

本授業の目的は、小学校図画工作科の「表現」「鑑賞」領域に関わる教材を制作し、学習指導に必要な基礎的な知識と造形力を育成し、用具・道具の使い方を習得するである。また、到達目標としては、①造形に関わる基礎的な表現力や知識を身に付けること、②作品を鑑賞する方法を習得し、分かりやすく解説できること、③素材や道具に関心をもち、子どもと共感的な制作活動ができる態度を身につけることとしている。

授業の内容は、「造形あそび」を各回の内容に取り入れ、造形的な遊びから造形活動（描画表現、立体表現、平面表現、工作）・鑑賞学習へ展開することを意識した内容としている。授業者が各回の具体的な授業内容や展開を考える時に、重視していることは、受講者が「子どもになること」である。題材への興味・関心、造形活動での発見や驚き、友達と活動を共有することの楽しさを彼らが素直に表情や言動に表せるような環境に配慮した。また、各回で題材が完結するように、題材設定や、授業の準備に多くの時間を要した。

受講生への評価については、受講者が各回の授業内容などを記入した「授業シート」をファイリングしたポートフォリオを主な評価対象としている。また授業初回において、受講者へは、欠席や遅刻を減点対象とすることを提示している。本受講者の多くが次年度前期に開講する初等図画工作科教育法を受講することになる（ある専修においては、カリキュラム上の問題で3年次で本授業を

受講すること場合もある）。このことを考慮し、授業者は、本授業においては受講者が実際に造形活動を行うことを通して、前述した目的を達成することとし、初等図画工作科教育法では、本授業での造形活動（学習）を踏まえ、理論的学習を行うという繋がりを持たせている。

2. 授業評価調査の結果と考察

2011年2月18日の授業最終回に配布した授業シート裏面に授業評価についての設問を記載し、受講生には翌週までにポートフォリオに入れ提出するように指示した。回答者数は47名である。

【設問1】あなたの本授業への取り組み <授業中の取り組み>①熱心に取り組んだ：43名、②取り組んだ4名、③あまり熱心に取り組まなかった：0名、<授業シートへの取り組み>①熱心に取り組んだ：17名、②取り組んだ27名、③あまり熱心に取り組まなかった：1名といった結果であった。概ね受講生が主体的に取り組んだ様子が伺える。特に授業中の活動では回を重ねるごとに主体的に楽しく学ぶ姿勢が多く見られていた。しかし、授業シートに関してはやや抵抗をもっていただようである。授業者の意図としては、授業時間中においては受講者が子どもとなって活動を体験し、授業後の授業シートに記載する取り組みの中で、その活動をイラストなどで視覚的に再現し、活動をふり返るものとしたいと捉えていた。受講者が記載した授業シートを見ると、記載内容の量や質ともに十分なものが多いが、それに対する授業者の評価の観点不明瞭であったことが抵抗を感じた要因であったと考えている。

【設問2】本授業で行った活動は、図画工作科で実際に行われている内容を多く含んでいました。授業を受けて図画工作科の教科内容のイメージが変わりましたか。①とても変わった：32名、②変わった：15名、③あまり変わらなかった（変わらなかった）：0名という結果であった。本授業で実施した内容は小学校図画工作科の教科書にある内容をアレンジしたものであった。この設問の意図としては、受講者に本授業で行った内容が特別なものでないことを意識させる意図があった。結果からは、本授業で扱った内容が、現在の小学校図画工作科の教科内容としては特別なことではない

ことを確認できる。

【設問 3】本授業で行った活動では、「体全体」で活動する内容や「想い」を重視した内容を扱っていました。それらの大切さを実感することができましたか。＜「体全体」を使うことについて＞①とても実感できた：38名、②実感できた：9名、③あまり実感できなかった（実感できなかった）：0名、＜「想い」の大切さについて＞①とても実感できた：40名、②実感できた：7名、③あまり実感できなかった（実感できなかった）：0名という結果になった。図画工作科は子どもが自らの「想い」を「体全体」で感じ表す能力を身につける科目である。本授業では特に「想い」を意識し、「体全体」で感じ表すことを意識した活動を行ってきた。結果からは、本授業の核ともいえる図画工作科における「体全体」の使用や「想い」の大切さを受講者が体験的に理解できていたことが伺える。

【設問 4】本授業において最も印象深い活動内容をあげ、その理由を記してください。以下回答数の多かった上位 3 活動を示すが、本年度の回答で興味深いのは、本授業全体についての記述が目立ったことである。ほぼすべての授業で行った「散歩すること」（制作する「想い」づくりの活動）や、活動を通して自然物や日常の色や形に目を向けさせられたことを捉えている受講者が多かったことである。授業者の意図をよく理解し学んでいたことがよくわかる。

16名「いろをつくる いろとあそぶ+たなびかす」（12月2日、12月10日）活動概要：グループでペースト状にした小麦粉に赤・青・黄の三色の食用染料をそれぞれに入れて小麦粉絵の具をつくる→絵の具の触感を楽しみながら布（90cm×200cm）に小麦粉絵の具で色をのせていく→各グループのオリジナルフラッグをつくる→完成→各グループでフラッグを持って構内を行進→12のグループを二つのグループに分けてフラッグをバトンにしてリレーをする→全員で記念撮影。6名「大切なひかり」（12月17日、12月22日）活動概要：絵本・市原みか『ろうそくいっぽん』（小峰書店、2008）を読む→受講者個々の「大切なひかり」を想う→アイデアスケッチ→ろうそくづくり→針金と木の板でろうそくの居場所をつくる。5名「ギコギコ トントン コロボックル」（1月28日、2月4日）角材や丸太をノコギリで切って積み木をつくる→コロボックルがいそうな場所を想う→木材を切って、その木に釘を金鋸で打って、小さなコロボックルをつくり、コロボックルがいそうな場所で記念撮影する。

この設問意図は、受講生に設問 1～3 を具体的な活動に結びつけて振り返らせるためと、本授業

の目標に対する評価を端的に知るためである。受講者は、自身がこれまでに経験していない内容や方法が顕著だった題材に対して回答をしている。また、他教科の関連を意識した教材にも回答をし、小学校全科教育の可能性を見出している受講生もいた。

3. FD 活動としての授業公開

12月2日（木）5限目に402教室にて教育学部FD活動として初等図画工作（担当：杉林）を公開し、カンファレンスを行った。授業を参観していただいたのは、保健体育教室から7名、音楽教育教室から3名、幼年教育教室から1名、美術教育教室から3名の計14名の先生方である。

授業内容は前述の受講生が最も印象深いものとして回答した単元「いろをつくる いろとあそぶ+たなびかす」である。48名の受講者を12グループに分け、後日旗にしてみんなで散歩することを知らせた上で、グループ活動として小麦粉絵の具をつくり、大きな布に思い思いに絵の具をのせていく内容である。受講者は、小麦粉絵の具のネチャネチャとした触覚的な刺激や赤・青・黄色の三色の色から色がさまざまに混ざっていく様子を視覚的に楽しんだり、ロズさみながら体を動かしリズムカルに絵の具をのせていったりと主体的な活動を見せていた。参観していた先生方の中には、グループの中に入って実際に絵の具に触れていたきながら、受講者の視線で本授業を体験していただけた方もいた。

カンファレンス時にいただいたご意見としては、授業時に受講者が子どもになって取り組んでいる姿は興味深いですが、活動を「学び」として共有や定着することについては授業では見られなかったことが残念だというのが主であった。ご意見をいただいたように授業者としては、授業中に「学び」として共有や省察する時間が確保できていない問題は自覚している。授業シートを活用した共有や省察を今後の課題として考えていきたい。参観していただいた先生方には貴重な時間をいただき、多くのご指導と激励をいただきました。ありがとうございました。

